

小学部長 吉田 太郎

春らしい、とても爽やかな朝となりました。

1年生の皆さん、ご入学おめでとうございます。(ありがとうございます)

はい、とっても上手にご挨拶ができましたね。素晴らしいです。

ここにいる80名の1年生、皆さんのご入学を、2年生から6年生までのお姉さんたちや先生たちも心から嬉しく思っています。

さて、皆さんが入学するこの学校は、なんという名前の学校か知っていますか？

そうですね。東洋英和女学院小学部ですね。

私は小学部の部長の吉田太郎といます。これからもどうぞよろしくお願いします。

皆さんは3月までは幼稚園や保育園に通っていらっやったと思いますが、4月から学校に入ったら、何をするか知っていますか？(お勉強) そうですね。

学校はお勉強するところですね。これから毎日、先生方から、いろいろなことを教わって、とっても楽しい時間になると思います。でもお勉強と言っても、いろいろなお勉強があります。机に座って先生のお話を聞くだけがお勉強ではありません。小学部ではお友達と遊んだり、給食をみんなと一緒にいただいたりすることもお勉強です。

そしてもう一つ、東洋英和女学院小学部では、普通の学校とは少し、いや大きく違う

お勉強があります。それは、聖書を読んで、神様のお話を聞き、讃美歌を歌って、一人ひとりが神様に「愛されている」、「大切にされている」ということを知ること。これが一番大切にしているお勉強です。

どうしてかって言いますと、それは、この東洋英和女学院小学部は神さまによって建てられた学校だからです。

「ええ！？神様がこうやって、トントン、カンカン！って作ったの？」って、そういう意味ではありませんよ。天にいらっしゃる神さまが、私や、皆さんのお父様やお母様が生まれるよりも、ずーっと、ずーっと昔に、『日本の東京の麻布鳥居坂…、この地に女の子のための学校が必要です。』そう、お決めになったのです。そして、まだ飛行機のない時代に、カナダという国から、City of Tokyo 号という船で、はるばる大きな海を渡って、マーサ・ジュリア・カートメル先生、お名前が長いのでカートメル先生と覚えましょう。カートメル先生がやってきて、東洋英和女学院という学校を作るためにお力を尽くされました。

そして、およそ 140 年という月日が過ぎて、今こうして、ここに私たちがいるのです。とても不思議な、そしてとても素晴らしい出来事ですね。

ここにいる皆さん、一人ひとりが神さまのご計画によって、この世界に生まれてきました。あなたはとても、とても大切な人です。あなたが大切なものと同じように、あなたのお隣に座っているお友だちや、この入学式に参加している 2 年生から 6 年生のお姉さんたち、先生たちや働いてくださっている人たち、お父様やお母様も全員、

神様がつくられた大切なひとりです。

東洋英和の小学部での最初のお勉強は、

『神様はあなたのことが大好きです。だから、あなたは大切なひとりです』

今日はまず、このことを覚えておいてくださいね。

神様のことを学ぶ東洋英和女学院では小学部だけでなく、中学部や高等部、大学まで全ての学校で全ての先生たちが大切にしている言葉があります。

それは「敬神奉仕」という言葉です。

『私たちのことを愛してくださっている神様を大切にすること。』

『神様が創られた周りの人のことも自分と同じように大切にすること。』

これは、『神さまのため、人のため』というように、覚えておいてもいいですね。

ちょっと難しいけれど、これから少しずつ、「敬神奉仕」ってなんだろうって一緒に勉強していきましょうね。

皆さんの中には、これから毎日学校に通うことになって、楽しみだけど、もしかしたら、ちょっと心配だなあ、お友達ができるかなあ、電車やバスでの登校は大丈夫かなあ、朝ちゃんと起きられるかなあ、なんて考えているお友達もいるかも知れません。でも心配はいりませんよ。少しずつ、ゆっくりと慣れていきましょう。失敗しても大丈夫です。困ったことがあったら、たくさんの先生たちが皆さんのことを助けます。学校にいるお姉さんたちも皆さんのことが大好きですから、きっと助けてくれます。

どうぞ安心して学校へ来てくださいね。

これから、少しおうちの方にお話をしますね。

最後になりましたが保護者の皆様、本日はお嬢様のご入学おめでとうございます。

教職員一同責任を持って小学部を築立つその日までこの80名の教育にあたります。

変化の大きな社会情勢の中にあっても、140年という歴史と伝統をもつ東洋英和の

教育、敬神奉仕という建学の精神は揺らぐことはありません。

私たちは日々よく祈り、神様の御前に謙遜な心を持って、一人ひとりの子どもたちに

丁寧に向き合い、しっかりと役割を果たしていけるよう最善を尽くして参ります。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

これで、私のお話を終わります。